

「取替後の換気扇による換気・除湿効果の考察（つ）」→ つながりをもとめて

つながりといえはすぐ思いつくのは人と人のつながりである。学生時代の友人とのつながり、職場の同僚とのつながり、学会や研究会、趣味の集まりなどなど。私も78年生きて多くの人とのつながりの中で暮らしてきた。ただそれらのつながりも年々希薄になっている。学生時代の友人とは今はほとんど没交渉になり、職場の仲間達も私が定年退職後は急速に疎遠になり、わずかに年賀状の交換を続けているのが数名いるだけである。

夫婦のつながり、親子のつながりは最後まで残りそうだが、それもいつまで良好であり続けられるかは保証のかぎりではない。数年先には65歳以上の一人暮らしは二人暮らしより多くなるそうだが、一人の方が二人より快適で幸せと感じている人の方が多いという調査結果がでたと新聞が報じていた。

マンションの管理ではコミュニティが大事だというのが定説になっているが、そのあり方は時代と共に大きく変容してきているという。先日「おとなのための住まい学がなぜ必要か」という住総研主催のシンポジウムが大阪市立住まい情報センターであった。その中で私が興味をもったのが、株式会社チームネット社長の甲斐氏の講演だった。彼は大きな屋敷を建替えた15世帯のコーポラティブハウスで住民達が濃密な交流を続けている日常生活の映像を教えている大学生に見せて、こういう住宅に住みたいか聞いたら7割が住みたくないと言ったという。最近の若者はコミュニティに煩わしさを感じているのではないかという。

私も、35年間も濃密なコミュニティが売り物のコーポラティブハウスに住んでいるが、だんだん人間関係がうっとうしく思えることがあり、最近はあまり交流しないようにしている。甲斐氏はコミュニティを活かすことと仲良くすることとは別もので、「煩わしさ」を意識させずにコミュニティを機能させるための他者と関係の取り方は「頑張って仲良くなろうとしない」ことだという。

話がかわるが、最近認知症が話題になることが多く、

65歳以上の5人に一人が、80歳では4人に一人、90歳では2人に一人が認知症なるという。私ももうすぐ80歳になるので他人事ではいられない。人生100年時代になり、マンションも適切に維持管理していけば優に100年は住み続けられる。しかし、住人がこれ以上高齢化して認知症が増加したら、管理はどうなるのか、管理組合は果たして機能できるだろうか。

私の住んでいる25戸のコーポ住宅も築35年になるが、住み心地がいいのかほとんど住み替えがない。住人は年々歳をとり、全て60歳以上で平均年齢も70歳を超えている。今でも2人が認知症であり、10年後を想像するのは恐ろしくなる。

ではどうしたらいいのか。今後のマンション管理の大問題になるだろう。あるマンションでは管理組合で見守り隊をつくったり、京都のある団地では敷地内に認知症共同住宅（グループホーム）を誘致する計画を練っているようだ。

建物が年々高齢化していくのは避けられないが、住民は交代できる。いたずらに住み続けることに固執しないで、適切な時期がきたら、若い世代と交代することを考えるべきではないだろうか。若いファミリーに売却するもよし、息子や娘に譲るもよし、会社や組織と同じく活性化するためには世代交代を積極的に図る必要があるように思う。

私事で恐縮だが、認知症になってしまった妻の世話を疲れてきて、長年住み慣れた思い出の詰まったコーポ住宅から、駅前に建っている食堂や大浴場があり、訪問介護や訪問診療のサービスが使えるシニアマンションに住み替えることにして、今の住宅はまだ40代の息子夫婦に譲ることにした。コーポの住人の若返りに少しは貢献出来るかと思っている。これで妻のことも少し安心できるし、なにより私自身が毎日の食事づくりから解放されることがうれしい。

（監事 近野正男）

※今回のタイトルは、「て」から始まることばです。